

安土桃山時代に於ける吉田家 と曲直瀬家の関係について

安井 広 迪

いわゆる後世派医学の祖、曲直瀬道三は、十三年にわたる田代三喜のもとでの修業の後、一五四五年に京都に帰り、医人としての活躍を開始した。そして、彼の主唱する医学体系は、時を経ずして日本医学の主流となり、それ以前に行われていた医学は、曲直瀬流の中に取り込まれ、もしくは再編成されてその勢力を失い、やがて消滅していった。

彼の医学が、これほどまでに隆盛するに至ったのは、その体系が丁度その頃より勃興の途にあった儒学（宋学）の思想と軌を一にしていたからであるとか、初代道三の卓越した社交手腕によるものであるとか、玄朔を始めとしてすぐれた後継者を多数養成したことによるとか、さまざまなる理由があげられている。

更にこのことは、おそらく道三ただ一人が金元医学の発展型である当時最新の明医学を理解・実践できたことと深い関わりがあると思われるが、その背景には、一度も渡明したことのない道三が、必要な文献や最新の情報（当時の新刊本や中国に於けるニュースなど）、更には使用する薬物などを比較的容易に入手していたという事実が想定されよう。それは、道三の交遊関係とも深いつながりがあると考えられる。筆者は、その重要なものとして吉田家に注目し、両者の関係を調べた。

道三活躍当時、嵯峨にあって土倉業を営んでいた吉田（角倉）家は、またその家祖徳春以来の医家の家系であった。そしてこの家系は、四代目に至って宗桂という名医を登場させる。彼は、天竜寺の僧、策彦周良に従って二度まで渡明し、名医としての評判を得て帰朝している。彼が優秀な医師であったことは、明の世宗の病気を治したという逸話や、最初の渡明後、天文十九年に一条殿の邸宅で『医方大成論』の連続講義を行っているのをもみても明らかである。

ところで、この宗桂と道三、ひいては吉田家と曲直瀬家

は、残された資料から見る限り、相当に親密な関係にあったと推測されるのである。次にいくつかの例をあげる。

まず、両者には共通の友人が存在した。『言繼卿記』『言経卿記』に、道三・玄朔・宗桂の名が登場することは、山科家を通じた両者の交流を、また宗桂を伴って渡明した策彦が、道三の『啓迪集』の題辭を書いたという事実は、策彦を仲介にした交遊関係を想定させる。

更に、泰宗巴は吉田宗桂の紹介で道三に入門しているし、『道三家譜』は宗桂の哲詞が曲直瀬家にあったことを伝えている。これらのことは、宗桂が道三の医学を非常に高く評価し、自らも学ぶところの多かつたことを示している。この評価は、宗桂の次の世代になっても変わることはなかったようである。

例えば宗桂の次子、宗恂が癰を患ってその最後を迎えるとき、大阪にいた玄朔がかけてつけて治療に当たっている。玄朔は宗恂ばかりでなく、吉田家全体の主治医のような役割をしていたらしく、彼の医案集『医学天正記』には、吉田與次(吉田本家嫡男・宗桂の甥)と角倉了以(宗桂の長子)の治験例が載せられている。そして、これら医学上のつなが

りは、更に家と家との関係を深めたものであるらしい。角倉了以は二男三女の子持ちであったが、その長女は曲直瀬道三の養女となって曲直瀬家に入っている。彼女は天正十九年に没し、吉田家と曲直瀬家の姻戚関係はそれ以上進むことはなかったが、この一事をみても両家の付き合いは深いものであったことは疑いをいれない。

なお、吉田家は医を業としてきたため、宗桂、宗恂以外にも医師が多かった。そのほとんどが曲直瀬門で学んでいる。

一方、吉田家のもうひとつの家業は土倉業であり、了以・素庵父子の安南国との交易の目的が主として薬物の輸入にあったことが当時の文書より知られ、これは多くの医師たちの需要を満たしたであろう。曲直瀬家もこの交易に頼むところが大きかったと考えられる。また、宗桂は渡明の際に沢山の医書を招来しており、宗恂や素庵が大変な蔵書家であったことも知られている。多くの人が指摘するように、吉田家はその家業によって得た富をバックに、文化の供給源としての役割を果たしていた。渡明の経験のない道三が『啓迪集』の編纂に際し、六四種の医書を参考にし

得たのは、吉田家との緊密な関係を抜きにして考えられな
いと思われ、両者の関係はその後の後世派医学の発展に大
きな影響を与えたことが想像される。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

名古屋玄医の医学思想と

『医方問余』について

花 輪 壽 彦

名古屋玄医（一六二八—一六九六）はいわゆる「古方派」
の嚆矢として有名であるが、その医学思想と数多い彼の著
作についての詳細な吟味は、未だ甚だ不充分である。

よって、彼の医学思想と代表的な著書とされている『医
方問余』について若干の考察を試みたい。

彼の医学思想の根本の一つは「貴陽」（陽を貴ぶ）であり、
もうひとつは「歴試」（歴あまねく試みる）であると思われる。

「貴陽」とは『陰陽心象大論註疏』の中に、「貴陽は枢業
（素問・靈樞）の本旨なり、易の義なり」「四百四病ひとり
一陽の鬱と衰とにて起らざるはなし」とある如く、病気の
原因を中国医学に伝統的な「陰陽論」に立ちかえて説き、
陽気を生命の根元とし、陽気を助けることを治法の原則と
する考えである。この考えは金元以降の中国医学が「臟